

産婦人科医として臨床現場で仕事をした経験から、公衆衛生分野に興味を持つことができました。県庁で新型コロナウイルス感染症対策に携わり、行政の立場から臨床現場への支援ができたことをうれしく思っています。まだまだ行政医としての経験は浅いですが、今後は公衆衛生の面白さを伝えていけるようになりたいです。

産婦人科医として歩む

私は、学生時代はまったくといっていいほど公衆衛生分野には興味がなく、国試対策のために勉強した程度で、保健所実習もほとんど記憶にありませんでした。そんな自分が自らの意志で行政医となり、「期待の若手シリーズ」の執筆をさせて頂く機会を得るとは、人生は何が起きるか本当に分からないなと思いました。

筑波大学に入学し、病院実習中に帝王切開分娩に立ち会い、生まれてきた赤ちゃんと対面したお母さんの笑顔に感動し、お母さんの側

のお手伝いができる仕事をしたいと産婦人科医になることを決めました。

初期研修を東京医科歯科大学附属病院で行い、そのまま同大学の産婦人科の教室に入局しました。入局後は茨城県や東京都の市中病院で勤務していました。夫が筑波大学大学院に進学することが決まり、学生時代を過ごしたつくば市に本拠地を置くことになりました。以前勤めていた茨城県内の病院にご縁があり、また再勤務することとなり、以前勤めていたときよりも、要支援妊婦が明らかに増えていることを感じました。経済的に困窮

きる人材はいないかと相談され、よかつたら行ってみないか、というお話がありました。大学院もやつと始まったばかりで抵抗がありました。が、大学院も継続しながら、実際の公衆衛生の現場で働く機会も得られるということ、悩んだ末にこれにご縁と考え、行政に入ることを決意しました。

臨床医の経験を行政に 行政医の立場から臨床を支える

県庁の新型コロナウイルス感染症対応のチームに所属することとなりました。最初は、自分は感染症科の医師ではなく、コロナ患者の対応をしたこともなく、まず行政医の仕事さえもよく分からなかったの、自分はいったい何を求められているのかが分からず、戸惑っていました。そんなときに、水戸市保健所の所長にごあいさつする機会があり、「行政医としてやっていくために必要なのは何だと思えますか?」と尋ねられました。考えていると、「臨床医であり続けることです。あなたはそのために来たのですよね?」と言われました。その言葉がとも心に響き、行政医になるために

していたり、周囲の支援が乏しかったり、未婚だったり、若年だったり、妊婦健診の受診が不定期だったり、理由もさまざまでした。病院での要支援妊婦の対応は、行政と情報共有しながら妊娠から出産まではサポートを行います。産婦人科医の私は、出産後は行政のフォローアップをお願いするしかありませんでした。産科的には出産はゴールですが、家族にとってはスタートであり、あのお母さんと赤ちゃんは大丈夫かな、無事に子育てはできているのかな、と心配になる症例に出会うことが多くなっていました。

公衆衛生医師へ 転向のきっかけ

育休中に、たまたま新聞で茨城県公衆衛生医師が不足しているという記事を読みました。そして茨城県庁で、公衆衛生医師確保の政策として、週1日程度、保健所

は、とばかり考えていたのですが、そうだ! 私は臨床での経験を行政に持つていきたいと思っていたのだと、と初心に戻れた感じがしました。臨床医をやってきたことで、公衆衛生分野に興味を持つことができたので、臨床現場の声をつなぐ懸け橋のようになりたいたいと思っていたことを改めて確認できました。

その中で、県内の限られた病床を有効に活用するために、コロナ患者の入院基準を作成することとなりました。臨床の現場からも、医療機関ごとに入院させる基準が違い、真に医療が必要な患者を入院させる前に、病床が埋まってしまうといった不安の声が寄せられていました。現場の先生方の意見や関係部署、他自治体の情報などを参考にしながら、県独自の「新型コロナウイルス感染症入院優先度参考スコア」を作成しました。作成までの道りは長く、運用されるまで調整にかなりの時間を要しましたが、実際に県内の医療機関で活用され始めると、臨床現場の先生方からたくさん感謝の言葉を頂くことができました。また行政内からも入院調整もスムーズに行えるように



茨城県保健医療部感染症対策課
服部 早苗

2008年3月筑波大学医学専門学群を卒業。東京医科歯科大学附属病院で初期研修を行い、同大学の産婦人科に入局。2020年4月に筑波大学大学院へ進学し、同年9月に茨城県庁入庁。

で勤務できる医師を募集しているということを知り、行政の母子保健事業についても知れるいい機会ではないかと思ひ、応募してみました。育休中で気持ちに余裕があったことや、復職しても平日1日の休みがある勤務だったことも後押しとなりました。後で県の担当の方に聞いたところによると、大病院に募集をかけていたが、全然医師が集まらなかったため、まさか新聞の記事を読んでもやってくる方がいるとは思わなかったということでした。リクルートするためのフィールドをどこに持つていくのかも課題だと、このときに思いました。

勤務先の保健所長の方がとても素敵な女性医師で、地域医療構想の話や災害対応の話など保健所の仕事のお話を聞くことができました。勤務先の医療圏は医師偏在地域として、全国ワースト5に入る医療圏で、全国トップ5に入るつくば

なつたという声を頂きました。動かしもの大きさと、動かすまでに時間がかかりますが、動き始めたときの達成感が本当に大きいものだと実感できました。行政の立場から臨床の現場に役に立てたこともうれしく、これが行政の醍醐味なのだと感じました。保健所の現場にも支援に赴き、県民へのコロナ対応を行い、その現場の声を県庁に届け政策に生かすなど、自分が行政で求められる仕事を学んでいきました。

2021年4月には国立保健医療科学院で前期課程の研修を受け、それまで行政でコロナ対応しかしてこなかった私は、保健所の業務がとても幅広く、県民の生活を守っているのだと知ることができました。2022年春からは、再勧奨されたHPVワクチン接種の普及事業など産婦人科医としての経験を生かした業務にも携わり始めました。今後は、興味のある母子保健事業や地域医療構想などにも行政医として携わっていければと思います。また、公衆衛生医師のリクルートなど、この分野の面白さを伝え、盛り上げていけたらと思っています。

社会人大学院生と行政 二足のわらじ

医療圏に住んでいた私は、隣の医療圏なのにこんなに地域格差があるのかと驚きました。救急の適正利用等の住民への啓蒙活動、消防との連携など、地域の医療を守り、支え合う取り組みを保健所が中心となつて行っているということを知りました。行政、臨床ともアプローチする方法は違いますが、住民の健康を守ることや身近な医療を守っていくという目標は一緒であるということを知り、行政の仕事にとっても興味を持てました。

公衆衛生をもっと学びたいと思い、筑波大学の公衆衛生の教室に社会人大学院生として進学することを決めました。入学が2020年4月であったため、新型コロナウイルス感染症の流行が始まり、社会が混乱している中でのスタートでした。新入生の大学への立ち入りが禁止され、思うようなスタートとはなりません。やっと大学への立ち入りが許可された6月に、突然教授から、県の公衆衛生医師が足りず、研究室の医師の中に県で働くことがで